[資料紹介]

国立国会図書館の「原昇“素人文庫”」

原　恵　子（Escobar, Argentina 在住）

1990年5月のある朝早く、原家の門前に大型トラックが止まった。ここは鬱蒼と茂る樹林の間に、富豪のセコンド・ハウスが並ぶ閑静な別荘地帯である。たちまち警察のパトロールカーが現われ、仕事中の人夫に銃を突き付けた。引っ越しと見せ掛ける泥棒一味と見たらしい。私が飛んでいって訳を話してことなきを得た。日本の国立国会図書館が、大型コンテナを持ってきて、私どもが寄贈する貴重書などおよそ１万冊の書籍や資料、レコードなどを引き取りにきたのである。これらの本や資料は日本で通関後、厳重な薫蒸処理を経て国会図書館に運び込まれたが、整理に当たる職員はクシャミを連発だったという。そこで「これはアルゼンチンからきた”ハラコレ症”だ」という冗談も飛んだらしい。

これら膨大な蔵書を集めた父原昇（はら・のぼる）は1928年、一橋大学を卒業後、すぐ横浜にある親戚の加藤商会に入った。アルゼンチンにいる父親原利吉（はら・りきち）の原商会を継ぐための修行だったが、まず「シュッパンバコの荷造りを毎日やらされたものさ」と後年笑いながらよく話していたものである。翌1929年、アルゼンチンに渡ってきて原商会の経営を継ぐことになる。

アベニダ・ベルグラノ大通り1470番地にあった原商会は、通りに面して間口16m、奥行きが50mの大きな店舗だった。終戦後の日本の疲弊時代には、日本の有名商社がここに間借りしていたし、1980年に店じまいするまで地元企業などが事務所をおいていたものだった。戦前は原・加藤合弁会社として、手広く現在の中国と貿易をしていたので、地下の倉庫には美しい家具やびょうぶ、花びんなどが納められていたし、かわいいキュー・ピーや人形もあるので、見に行ったことを覚えている。太平洋戦争で貿易を中断されたが、戦後はいち早く商売替え、織物工場を建てて、繊維製品の国内販売を始めた。「睡蓮」、「木蓮」などの商標が有名だった。

父が本の収集を始めたのは商売も軌道に乗り、とくに第二次世界大戦後のヨーロッパから、世界各国の稀観本がアルゼンチンに集まってきた頃からのようだ。もともと大の読書家で、そのうんちくを傾けて邦字紙に論説を発表したりしているのである。そこで商売にそそいだ情熱に劣らない熱意を本の収集にも集中したことは疑いない。週末はいつも本屋回りをしていた。ユダヤ人の本屋ロッツスタインから電話が掛かってくると、食事中でもすぐ立上がるので、「またロッツスタインからの電話だ、ご飯もお汁も冷めちゃうよ」と、孫たちにからかわれたものである。

父の金に糸目を付けない本集めのなかには、14世紀の時代の古い物件もあったから、破損し掛かっている表紙をまったく美しく作り替えるのが母の役目であった。製本装丁の先生について本格的に勉強したものだという。いまも、本をとじるときに使う道具が原家に残されている。あまりに重いので、さすがの国会図書館も運んでいくのを断念したようだ。

40年間にわたる歳月の間に集めた膨大なコレクションを納めようと、父は私邸内の一角に「素人文庫（そじんぶんこ）」と名付けた一部３階建ての図書館とその付属施設（スイミング・プールもあった）の建設に取り掛かったが、その完成をまたず87年、83歳で亡くなった。４人いる孫の誰かが司書学を学んで自分のあとを継いで欲しいと願っていたが、原商会はその三代目の当主修が若くして病没したため、80年、閉鎖せざるを得なかった。もう10年待ってくれたら孫たちも大学を出て、祖父や父の事業を継げたのにと、残念でならない。こうして目に見えるコレクションは前述のように日本に運ばれ、母は私財を国に寄贈したとして紺綬褒賞と木杯を日本政府から贈られ、また孫たちにも目に見えない大きな遺産が残されたのである。

さて海外にあって親がいちばん苦労し力を注ぐことの一つに、日本語教育がある。アルゼンチン生まれの私の子どもたち4人も当然スペイン語で教育を受けた。日常会話ももちろんスペイン語であったが、幼いときから読書が好きだったことがさいわいした。これは4人に共通していて、祖父から影響されたのか。毎月、日本書店に行って買ってもらう小学館の雑誌は年齢相応のものが与えられ、その日はふだんは騒々しい原家がシーンと静まり返った。日本語を覚えなさいと国語の教科書だけをあてがっていたとしたら、今日の子供たちの日本語の読み書きはもちろん、日本から来られる方も驚くような会話の域には達していたかどうかは分からない。しかもそれが、国立国会図書館内に原コレクションができるきっかけになろうとは誰が想像し得ただろうか。

話はさかのぼる。アルゼンチン・タンゴがお好きな湯沢さんをご案内していた私の長女がたまたま、おじいさんの蔵書の話をしたところ、国会図書館にもよく出入りなさる湯沢さんがその話を国会図書館側に通されたらしい。さっそく国会図書館から調査員がこられ、調査の上いっさいを引き受けてくださることになったのである。

ここでその内容について書くと、洋図書5434冊、和図書78冊、文書類366袋、レコード975枚、布地見本など18箱となっている。分野は多岐にわたっており、とくに書誌、印刷、装丁、製紙などのほか、歴史、民族、探険、地理など、また中南米関係図書が圧倒的に多いなかで、とくにアルゼンチンの歴史、地誌、旅行記、文学作品が目につく。「マルティン・フィエロ」の解説辞典などは30冊近くあり、「ドン・セグンド・ソンブラ」も10冊近くあった。別に日本語の書籍が3000冊ほど残されたが、その一部が地域諸団体に寄贈されている。国会図書館のインキュナブラ（15世紀後半に刊行された西洋の初期刊本）が原蔵書で一挙に９冊も増えたといわれたのは、「Augustine, Saint, Bishop of Hippo」以下である。

昨年（1997年）10月15日、成田に着いた主人と私は、その翌日国立国会図書館を訪れて、原コレクシオンを東京に運んだ一星さんに会った。3年前に訪れたときはまだ山積みされたままで、「これから整理分類が始まります」と係りの者が言っていたのが、今回は「原コレクション」のなかに納まっている。一万冊近い本はもとより、店で使っていた台帳や帳簿に書類などのほか、レコードまで整然と棚に納められていた。とくに貴重書のなかの貴重書インキュナブラ9冊は、いくら大きな地震があってもここだけは大丈夫、といったところに真っ白い紙に包まれたうえ、木の箱に納められて”鎮座”していた。温度、湿度が自動調節されており、許可がなければたとえ寄贈者といえども入室を許されないのである。国会図書館の

職員でも直接の担当者でなければ、私たちに同行することさえ許されなかった。私どもはなん度スリッパをはき替えたか分からない。かぎのかかっている保管室を幾つか抜けるたびに、スリッパをはき替えるのである。もちろん、写真撮影などとんでもない。カメラはすでに取り上げられていた。貴重書49点、準貴重書18点、もちろんインキュナブラ9冊などは別格である。図書館側から感謝の言葉があった。

国会図書館に寄贈したことが原家にとってもよかったと思っている。父の1冊の本を手に取るときの眼差し、1ページをめくるときの慎重だった手付きを思い出す。「お父さんがたいせつに扱われた蔵書は、世界で一番よい場所に保管されていますよ」と、誇りと自信をもって墓前に報告できる私はしあわせであると思っている。

［編集部注］

本稿で紹介されている「原コレクション」は国会図書館特別資料室にて、洋図書5434冊が所蔵されています。また同コレクションについては『如水会々会報』1987年8月号第688号、『国立国会図書館月報』1992年11月号第380号、1993年6月号第387号にそれぞれ簡単な案内記事があります。また文中の加藤・原商会については、加藤平治『メキシカン・ラプソディー』総合労働研究所1984年が、またアルゼンチンへの日系人移住史に関しては今井圭子「アルゼンチンへの日本人移民史」（水野一編『日本とラテンアメリカの関係』上智大学イベロアメリカ研究所1990年）が参考になります。（田中高記）